

活動家の持続的煽動的運動が永続的斗争として提起される。だが、大衆をアジテーションのみで動員することも操縦することもできるものではない。大衆は、革命の条件があたえられるとき、すなわち外部情勢の作用をうけて行動的な共同体に変化するとき、行動をする決心をする。それは客体としての大衆から主体としてのプロレタリアートへの変形である。その場合に彼らは、熟練労働者の「労働のヒューマニズム」でなく、なにものをもたないが故に、「欲求のヒューマニズム」として一切を欲する。たとえば、一九三六年の政治的勝利は、社会運動の伝染性的伝播の口火が切られた時、急激な連鎖反応現象のうちに、大衆が革命的群集に変形することを示している。この大衆を前に恐怖して、「秩序」ある行動を主張した者のうちに、労働組合主義者が多数いた。——かくして、本節の冒頭にかかげてきたサルトルの言葉の意味が明白となった。すなわち、エリート労働者でなく、近代特殊労働者（大衆）が歴史をつくる主体であるとすれば、もはや一九五〇年代のフランスの労働者には、「砂漠のなかで説教するようにアナキズムの労働組合主義が説いても誰一人聞き手がいない」のだ、と。労働組合主義の歴史的役割はすでに終わったのだ。

<附記>五〇枚の約束がその三倍近くにふくれてしまった。しかし「結語」を書くにはまだ、未展開の問題が多くあるように思われる。カミュ、特にサルトルの核心的な内容が不充分なとらえ方のように思えるし（わからないところもかなりある）、だから、この論争が古典研究とどう結びつくか、あるいは現代の問題とどう対応するかといった問題は、残念ながら「禁欲」せざるをえない。他日に期したい。

## 【 所 報 】

### I. 春季合宿研究会について

2月5日の社研事務局・「近代化」幹事会の合同会議、および2月20日の「近代化」幹事会において、春季合宿研究計画を練った結果、本年度は、3月26・27日を(1)宮川 澄『日本における近代的所有権の形成』合評、(2)長 幸男・住谷一彦共編『近代日本経済思想史I』合評、(3)情報社会・管理社会論の動向、の三本を軸とする研究会にあて、同28日に、新発足した新日本製鉄君津工場の見学を行ないました。見学の都合上、合宿は館山で行なわれました。詳細は追って報告いたします。

II. 資料室整理のお知らせ — 2月13日から4日間を費やして、社研資料室（生田図書館5階会議室隣り）の、(1)文献の項目別分類と書架への配列、(2)全資料のカード整備、(3)定期刊行物

の整理を完了しました。2月13日以前の所員借出し図書は、こんご当分の間、直接書架にでなく、社研事務局に返還されるようお願いします。

### Ⅲ. 研究会のお知らせ

- (1)比較体制論グループ——吉家清次「後進国における独占的成長の理論」(2月14日)
- (2)第15回定例研究会(1930年代研究グループと共催)——平館利雄・池田博行・加藤佑治・殿村晋一・宮下誠一郎「1920—30年代におけるソ連の極東政策」(2月26日)
- (3)「要綱」研究グループ——吉沢芳樹「マルクスにおけるリカードウ理論の発見と批判」(3月17日)

＜編集後記＞ やや遅れたが3月号刊行のはこびとなった。この号がお手許に届く頃は新学年の講義も始まり、所員各員は御多忙のことと思うが、今後ともその御研究の一端を月報誌に寄せられ誌面をかざって下さることを期待している。

ところで、かつては一般に考えもしなかった超高層ビルが既に都内に二箇所建築され、更に建築中もある。また航空機もより巨大化してきている。このようなビルの高層化・機体の巨大化はたしかに科学技術の発達の結果もたらされたことに違いない。がしかし、巨大なビルはその周辺に乱気流を生じ風の強い日には附近の建物や通行人に思わぬ被害を与えているようであるし、巨人機ジャンボは旅貨客の塔載、給油の技術面からダイヤ通りの運行を確保し難く、空港運営に多大の影響を及ぼし、空港関係者に犠牲を強いる結果になっている。超高層ビルを建てることによって生じる気流の変化を予測せずに、構造上可能なるが故に建築を行ない、空港施設の容量を無視して巨人機を就航させることには一種の進歩とはいえ何か甚だしく不調和を感じる。しかもこれは唯単に科学技術の進歩のズレというにとどまらない日本社会に特有な要素を含んでいるように思われる。高層ビルの展望台は常に混雑をきわめているし、初めてジャンボが羽田に飛来したときは長時間の遅れにも拘らず、空港開設以来の多数の見物人がおし掛ける仕末である。万国博覧会が開かれれば、全日各地から農協その他の率いる団体が連日千里丘に押かけて行く有様をみていると、日本人は何か社会生活のアンバランスをアンバランスとも思わず一つのことにのみ殺到して行く性癖を持ち、それが社会全体として不調和の調和を保っていると思わせられる。こんなことを考える昨今である。(M)

神奈川県川崎市生田 4.764

専修大学社会科学研究所 電話(044)91 7131〔内線63〕

(発行者) 江 沢 譲 爾